

Title	文禄慶長の役(池内宏著, 東洋文庫刊行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.159(323)- 160(324)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0161">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0161</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 伯耆八尾甕棺遺蹟

### 攝津福井海北塚古墳

#### 備前行幸村花光寺山古墳

等の十基を含み、此等は何れも古墳墓研究上各々重要な位置を占めるものであつて、茲にその全般に亙る紹介は紙面のよく費し得ない所である。二三述べれば棺臺側面に格狭間を有する河内御嶺山古墳、竪穴式石室の完存する攝津萬籟山古墳、伯耆下北條出土の鹿埴輪等極めて興味深いものがある。特に近江安土瓢箪山古墳にあつては後圓部に墳の主軸に直角の方向を取つて三個の細長い竪穴式石室があり、更に又前方部に二箇の箱式棺のあるといふ極めて複雑な構造を有する前方後圓墳であるが、是等の配列はそれ〴〵秩序があり相互の密接な關係が察せられ、或は家族墓の性質を示すものと述べられてゐる。誠に竪穴式石室の構造に確實な一大資料を提供せられたと云ひ得べく、學界に未解決の前方部の性質を考へるにも亦重大なる資料といはねばならぬ。攝津福井海北塚古墳に於ては石室内遺物出土状態の特異性及び出土鏡の傳世品なることを注意せられ、『竪穴式石室を中核とする本墳の營造が成つて後に、古い傳世品を更に奉獻的な意味で其の封土の一部に埋めたとする推測を加へしめることになる』と。これは注目すべき新事實と云はねばならぬ。備前行幸村花光寺山古墳は長持形石棺を有するものであるが、その石室の性質により同式棺を内容とする古墳系列中それが比較的後期に位するのを思はしめると斷定せられてゐる。遺物としては一面の銅鏡と銅鏃とが特に注目される。

後者の田澤氏によつて調査報告せられたる上野國總社二子山古

墳は徳川時代より既に注目せられた著明な前方後圓墳であつて、

『封土の南側に廣壇を有し、且つ後圓部并に前方部の双方に竪穴式石室を有せる特殊の制式に成り、その特徴中(一)封度外形が前後の高さ相等しく二子山式であり、且つ石室が竪穴式にして南面せることは前方後圓中の新式に屬するものであり、(二)石室の構造に於て主室に胴膨みを附し或は石室を切石造となせる等は、上代末後に盛行せる手法である、(三)又遺物中コ形勾玉は上代末或は奈良朝頃の遺物と推定せらるゝものである。』と述べられ、本古墳の營造年代は上代末頃を距ること遠からざる時期と斷定せられてゐる。

古來東國上毛の地は特殊なる文化地域として重視せられてゐるのであるが、その研究未だ畿内の如くならざるに、ここに本古墳の全貌を明示せられたことは感謝に堪えない。

我々は幾多の古墳が年々破壊せられ、古人の名句を如實に感ずるのであるが、かゝる報告書が公刊せられることは學界に新資料を提供するといふ意味に於てのみならず、後世に資料を遺存せしめる意味に於ても益多かる可きことはここに多言を要さざる所である。(保坂三郎)

## 文祿慶長の役

(池内宏著  
東洋文庫刊行)

著者は南滿洲鐵道株式會社歴史調査部の一員として、すでに早くより文祿慶長の役の研究に志し、大正三年その研究の一部を公刊して好評を得たのである。此戦役は國史上に於て非常に重要な

る事件であつたばかりでなく、朝鮮支那兩國に於ても重大なる影響を與へたものであることは言ふまでもない。國內に於ける此戰役失敗の影響は各方面に表れ、引いては豊臣家滅亡の一因をなし、朝鮮に於ては政治及び社會の革新を生ぜしめ、支那に於ては明朝の衰亡を早めるに至つたのである。特に朝鮮半島が我國の領土となつた今日に於ては、その國民性を知り、又實際的經營の方法を知るについても、此戰役の研究の必要な事は明であらう。然るに史料の缺亡及びその蒐集の困難の爲めに此大戰役に對する根本的研究が今まで行はれなかつたのである。博士が日鮮支の史料を讀破して、この空前の大事件の真相を究明せられんとしつゝあることは、誠に意義あることと言はなければならぬ。特に大正三年滿鐵歴史調査部の廢止後も公務の傍ら絶へず苦心して此研究を續けられた事は、本書の序に『大正七年以來古蹟調査の任を帯びて屢々朝鮮に渡り、其の間に或は京城に於いて舊奎章閣の群書を涉獵し、或は地方の舊家の藏書を探りて、新に獲得したる史料も鮮なからず。而して前稿を顧みれば敘述に論斷に、自ら意に滿たざるもの甚だ多かりしを以て、大正の末年、全く稿を改めたり。降つて昭和九年に至り、又其の稿本の一部に再度の補正を施し畢んぬ。今ま新に東洋文庫論叢として發刊せんとする「別編第一」これなり。』とあるに依て知らるゝのである。著者の研究發表の方針は之を正・別・附の三編に分けて刊行するゝ豫定であつて、先に

公刊された「文祿慶長の役正編第一」に於ては、専ら戰役の由來及び戰役開始以前の事情を究明されたのであるが、本書に於ては、

れてゐるのである。その内容を略記すれば、第一章第一軍乃至第三軍の京城進撃、第二章第四軍以下諸軍の動靜、第三章入京諸軍の動靜及び平壤占領、第四章黑田長政の黃海道經略、第五章加藤清正等の咸鏡道經略、第六章森吉成・島津義弘等の江原道經略の六章に分れ、附録として、東萊安樂院釜山・東萊二城陷落の圖についての圖版解説の一文をのせ、更に七葉の圖版と諸軍の行動を示す三枚の地圖とを挿入し、英文要約及び索引を附してゐるのである。東亞史上に於いて重大の意義を有する文祿慶長の戰役が博士の努力に依て真相が極められ、其の成敗の跡を明示せらるゝことは、歴史家にとつてばかりでなく、一般國民にとつても誠に有意義のことと思はれる。博士の一日も早く此の研究を完成さるゝことを希望する次第である。(今宮新)

### 文 瀾 學 報

(浙江省立圖書館出版)

從來浙江圖書館刊を印行し令名があつた浙江省立圖書館は、中國の學術を研討し、浙江の文獻を闡揚せんがために昭和五年文瀾學報第一卷を刊行し、翌十一年第二卷第一期第二期を出版するに至つたことは、學界のため寔に欣幸なことといはなければならぬ。文瀾は清代賜書を庋藏する閣名であり、浙江最著の文府である。

本書は内容頗る豊富、殊に浙江省の掌故學術に關する文獻が多い。第一卷の卷頭に於て浙江省立圖書館館長陳訓慈は晩近浙江省